

第2回イオンSATOYAMAフォーラム 実施レポート

第2回

2025.2.18 TUE

イオンSATOYAMA フォーラム

みんなで考えつくる ー新しいSATOYAMA(里山)ー

綾町イオンの森

開催場所：国連大学 3階 ウ・タント国際会議場 / オンライン併催

主催：公益財団法人イオン環境財団

後援：環境省・国連大学サステナビリティ高等研究所

■ 目次

■ 開会式 P3～P4

- ・主催者挨拶
- ・来賓挨拶

■ 第1部 P5～P8

- ・事例発表(宮崎県綾町)
- ・パネルディスカッション ～宮崎県綾町イオンの里山づくりの事例～

■ 第2部 P9～P13

- ・SATOYAMAの研究や実践内容発表
 - 京都大学 シチズンサイエンスにより里山の土壌を知る活動
 - 京都大学 新しい里山里海の共創～舞鶴市の河川における取り組み～
 - 国立研究開発法人 国立環境研究所 社会調査による地域の里山活動団体の研究
 - 国連大学 SATOYAMAイニシアティブ国際パートナーシップ
 - 千葉大学 君津イオンの森の楽しみ方・遊び方 君津イオンの森の育成・再生プロジェクト
 - 東京大学 人・地域・自然がつながり輝く新しい里山づくり
 - 東北大学 名取市における震災後の居住環境と自然環境の復興
 - 早稲田大学 環境課題をコンセプトとした商品づくりと消費者参加の仕組み

■ 第3部 P14～P16

- ・SATOYAMAの未来に関する意見交換

■ 当日の現場記録 P17～P19

- ・研究・活動紹介展示
- ・会場内の記録

■ 参加者アンケート結果 P20～P21

開会式

主催者挨拶

公益財団法人イオン環境財団
専務理事 兼 事務局長

山本 百合子

イオン環境財団は、SDGsが提唱される以前の1990年に日本で初めて地球環境をテーマとする企業単独の財団法人として設立されたこと、継続している財団の活動を紹介した。

今回のフォーラムのテーマである「みんなで考えつくる新しい里山」について「ひとつしかないこの地球をどのように残していくのか」、「次の世代に何を贈り物とすることが出来るのか」の問いを立てた。

来賓挨拶

環境省 自然環境局 自然環境計画課
生物多様性戦略推進室長

鈴木 渉

イオン環境財団がCOP10から生物多様性に取り組んでいることや、その活動により生物多様性が保全されている場所を、自然共生サイトとして認定する環境省の取り組みについて紹介した。また、国連大学サステイナビリティ高等研究所にSATOYAMAイニシアティブ国際パートナーシップ (IPSI) の事務局があることについて触れつつ、世界の生物多様性、持続可能性の未来に向けて取り組んでいる、イオン環境財団のフォーラムが国連大学本部において開催されることの意義の深さが述べられた。

ビデオメッセージ

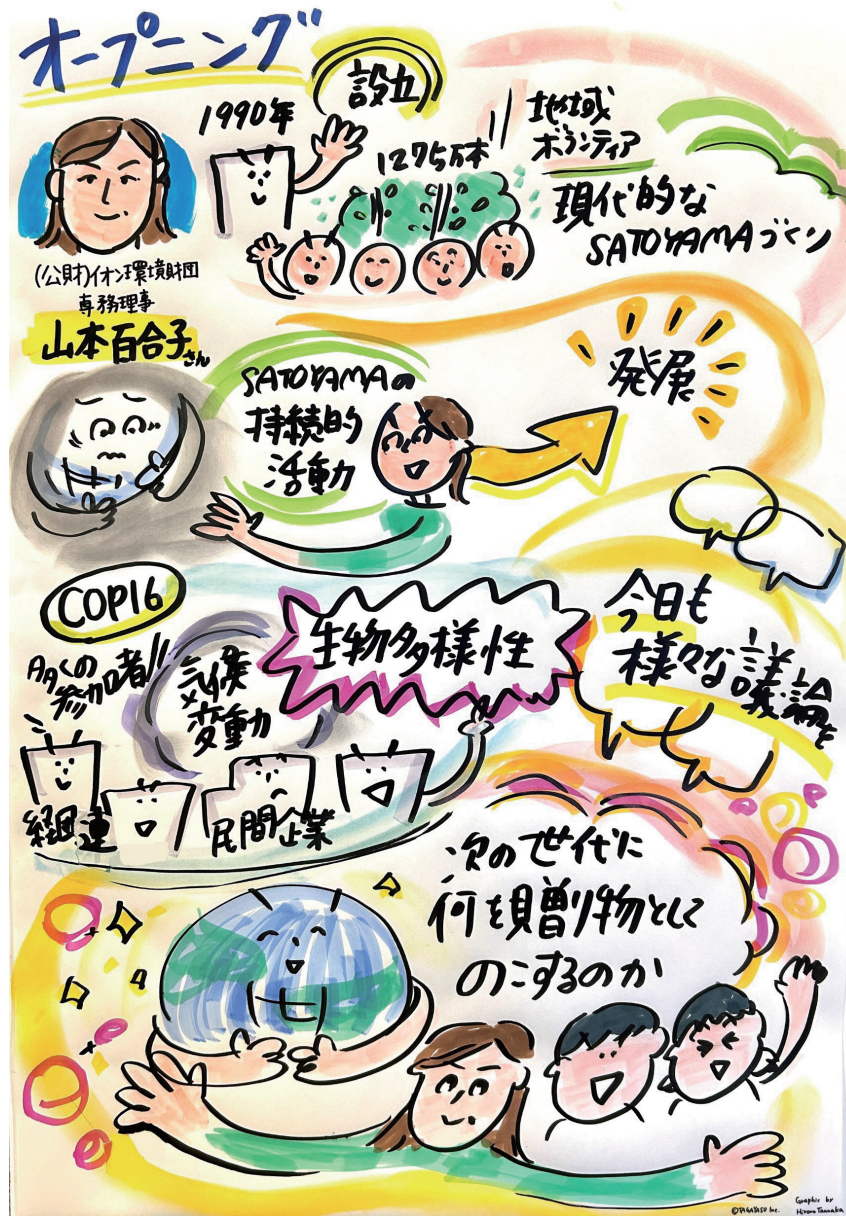
国連大学
サステイナビリティ高等研究所 所長

山口 しのぶ

国連大学サステイナビリティ高等研究所が取り組んでいるSATOYAMAイニシアティブ国際パートナーシップ (IPSI) の取り組みと研究の内容について紹介があった。その上で気候変動のインパクト、生物多様性の損失や人口減少の課題に人々が直面する中、本フォーラムを通じて様々な経験や見識を共有することで里山の再生へのさらなる理解が深められるきっかけになると期待を寄せた。

開会式

グラフィックレコーディング



今回の第2回イオンSATOYAMAフォーラムは発表内容をグラフィックレコーディングで記録している。

これにより、当日の様子や内容を振り返りやすく参加者のフォーラム内容に対する理解度の高まりが期待される。

グラフィックレコーディング担当者
株式会社たがやす 反中ひろの、友澤里子

第1部 イオン環境財団のSATOYAMAづくり

事例発表(宮崎県綾町)

宮崎県綾町 BR推進支援員
横浜国立大学 非常勤講師

河野 耕三



綾町は九州山地に位置する人口6,500人ほどの町であり、地域の伝統と先進的な環境施策を融合し、持続可能な里山づくりが行われていることを説明した。日本初の自治体申請によるユネスコエコパークの認定を受けたこと、さらに「里山生態林計画」として生態系と地域産業の関連性を深めるプロジェクトを経て、現在環境省から自然共生サイトの認定を受けたことが報告された。

第1部のグラフィックレコーディング



第1部 イオン環境財団のSATOYAMAづくり

パネルディスカッション ～宮崎県綾町イオンの里山づくりの事例～



続いて実施されたパネルディスカッションでは、里山づくりに関連する方々と宮崎県綾町の事例を通じて持続可能な里山の維持管理、利活用に関する重要なキーワードが提示された。

接点:生態系からのサービスを人々が享受する接点が不可欠であり、それを通じて里山を守ろうという機運が生まれる。自然と人間社会のバランスを保ちながら、その恵みを活かしている様子を実際に目にすることで、さまざまなものの関係性を理解することが大切である。

仲間作り:何かを始める際にすぐに集まってくれる仲間の存在が重要であり、仲間がいれば里山を守り、発展させていくことも可能になる。

エシカル消費:エシカル消費が1つのポイントとなり、里山の活動を経済的に支える社会を目指す必要がある。またその際には、科学的なデータや根拠に基づいた理論が必要となる。

森を活かしたコミュニティ:地域社会におけるコミュニティ力の低下を防ぎ、コミュニティの中で「自分がやらなければならない」という意識を作ることが重要である。

こうしたキーワードは、自然と人との繋がりを重視し、地域社会との連携を通じて里山を持続可能な形で維持・管理していくための重要な要素となる。

第1部 イオン環境財団のSATOYAMAづくり

パネルディスカッション ～宮崎県綾町イオンの里山づくりの事例～

パネルディスカッション 登壇者

モデレーター
公益財団法人イオン環境財団 事務局次長

西原 謙策

宮崎県綾町の里山づくりについて、関連する方々と里山の維持管理や持続可能性について、世代間を超え多面的な角度から議論した。



綾町役場
ユネスコエコパーク推進室 室長

倉前 省吾

綾町の町づくりの理念、歴代町長の取り組み、自然生態系農業の推進および綾町イオンの森での環境教育、自然共生サイトとしての連携協定について説明があった。



宮崎大学 農学部教授

光田 靖

日向夏みかん栽培における二ホンミツバチの役割についての研究内容を発表するとともに、有機農業と森林との関係を明らかにし、生態系サービスの評価を目指していることを発表した。

第1部 イオン環境財団のSATOYAMAづくり

パネルディスカッション ～宮崎県綾町イオンの里山づくりの事例～

パネルディスカッション 登壇者



綾町果樹振興協議会会長

児玉 隆一

日向夏の栽培におけるニホンミツバチの重要性について説明し、綾町イオンの森に巣箱を設置し地域の人々と協力して管理していることを発表した。



早稲田大学 文化構想学部

鮫島 采希

自らの綾町視察の経験を踏まえ、自然と人との繋がりについて考察し綾町の里山と農地が一体的に自然共生サイトに認定されていることの意義を発表した。

ディスカッションのグラフィックレコーディング



第2部 新しいSATOYAMA

～新しいSATOYAMAづくりに関して参加大学からの取組発表～

～SATOYAMAに関する研究や実践内容の発表～

京都大学—シチズンサイエンスにより里山の土壌を知る活動



京都大学フィールド科学教育研究センター

横部 智浩

京都大学大学院 農学研究科

神津 州佑

京都大学大学院 農学研究科

足立 浩太郎

シチズンサイエンスという手法を通じて、里山という場に対する市民の認識を高める活動について発表された。この活動では、市民が土壌調査の手伝いをするなど、研究に参加するきっかけを提供しており、こうした活動を通して研究者だけでなく、一般市民もデータ収集や分析などの科学的な活動に参加することが可能になり、地域の環境問題や生態系に対する関心を高める上で有効であることが示された。

京都大学—新しい里山里海の共創～舞鶴市の河川における取り組み～



京都大学フィールド科学教育研究センター
特任助教

八柳 哲

里海という概念に着目し、河川における生物多様性と生態系サービスの保全を目指した取り組みが紹介された。その上で管理者、漁業者、住民など様々な主体との連携を進めることで里海の認識を強化し、持続可能な生態系管理の体制づくりにつなげることを目標にしている。

第2部 新しいSATOYAMA

～新しいSATOYAMAづくりに関して参加大学からの取組発表～

国立研究開発法人 国立環境研究所—社会調査による地域の里山活動団体の研究



国立研究開発法人 国立環境研究所
特別研究員

包 薩日娜

里山保全活動団体の実態把握の重要性が指摘された。里山保全団体の継続についてのアンケート調査をもとに、団体の運営者の満足度や持続可能性に関わる要因と、団体の新しい里山里海づくりを目指したコンソーシアムへの参加意欲について検討された。また、里山里海環境保全活動の参加者増加を目指して、人々の理想的な里山里海像を検討した研究内容が紹介された。

国連大学—SATOYAMAイニシアティブ国際パートナーシップ



国連大学サステナビリティ高等研究所
プログラム・コーディネーター

三宅 里奈

里山イニシアティブを通じて、世界の里山・里海の保全や再生を促進する取り組みが発表された。多様な主体との連携や知識共有の重要性を強調し、持続可能なバリューチェーンの開発を通じた地域活性化の事例が紹介された。

第2部 新しいSATOYAMA

～新しいSATOYAMAづくりに関して参加大学からの取組発表～

千葉大学—君津イオンの森の楽しみ方・遊び方/育成・再生プロジェクト



千葉大学大学院 園芸学研究科

加藤 千尋 銭谷 卓人



千葉大学の大学院園芸学研究科はそれぞれ君津イオンの森をテーマとし、加藤氏は小学生を対象とした自然教育用リーフレットを作成し、自然体験を促進する内容を発表し、小学生だけでなく全世代に向け展開できる可能性について話した。また銭谷氏は君津イオンの森で発生する鹿やノウサギの苗木への食害に対し、植栽対策の検討を行いワラビの忌避効果や鈴による音での防除効果について発表し、新たな里山型森林づくりの可能性を示した。

東京大学—人・地域・自然がつながり輝く新しい里山づくり



東京大学 高齢社会総合研究機構
特任研究員

呂 瑋達

高齢化社会のwell-beingについて研究しており、高齢者の健康を切り口として、地域住民、企業、行政が連携したイベントの企画を通じて、里山活動の認知向上や参加者の拡大について発表された。こうした活動が社会全体に影響を与える社会権として広まっていく可能性が示唆された。

第2部 新しいSATOYAMA

～新しいSATOYAMAづくりに関して参加大学からの取組発表～

東北大学—名取市における震災後の居住環境と自然環境の復興



東北大学大学院 工学研究科
日本学術振興会 特別研究員

加藤 春奈

東日本大震災の被災地である宮城県名取市の閑上地区を対象に、ハードウェアの復旧だけでなく、人々の生活経済、地域文化、環境の回復を重視した「より良い復興」の必要性を説いている。居住環境の震災前後の変化や、地域コミュニティの再編、自然環境との関係性に着目した復興計画の必要性についての発表が行われた。

早稲田大学—AEONTOWAリサーチセンター 環境課題をコンセプトとした商品づくりと消費者参加の仕組み



早稲田大学 環境総合研究センター
主任研究員

中野 健太郎

西表島のプラスチックごみ問題や世界自然遺産の島での農業の課題に対し、観光だけでなく地元の物流・資源循環の課題解決を両立させる泡盛造りをテーマとしたワークショップ開催について説明され、消費者が生産者の現状に理解を示し応援する新しい消費をつくる「意味消費」の仕組み作りや知ることと生まれる価値等の提案がなされた。

第2部 新しいSATOYAMA

～新しいSATOYAMAづくりに関して参加大学からの取組発表～

第2部のグラフィックレコーディング

第2部 SATOYAMAに関する研究+実践内容

[京都大学フィールド科学教育研究センター]

発表

三枝ゲンサイエンスによリ里山の土壌を知る活動



新い山里海の共創

～舞鶴市河川はけ取り組



社会調査にお地域の

里山活動団体の研究



新しいSATOYAMAづくりに関して参加大学からの

! SATOYAMA イニシアティブ 国際パートナーシップ

1888-89



【君津イオンの森の育成・再生プロジェクト】 ノウサギ・シカによる
苗木への食害対策検討

ノウサギ・シカによる



名取市閑上地区における 東日本大震災後の居住環境と

自然環境の復興 - よ良復興目指して -



第3部 SATOYAMAの未来に関する意見交換

第2部までの発表を踏まえ 各大学の代表者・宮崎県綾町の河野氏を交え
様々な観点からSATOYAMAの未来についての意見交換を行いました。



京都大学フィールド科学教育研究センター
センター長・教授

舘野 隆之輔

すべてに共通することは、どの研究者もみな現場に出て情報を収集しているということ。多様な切り口で里山の現状を報告している。未来の里山を考えていく上で、あまり里山に関心を持っていない人をどのように巻き込んでいくかを考えて行く必要がある。



早稲田大学大学院
環境・エネルギー研究科

齋藤 瑠斗

Z世代は自分ゴト化することで価値を認識する傾向がある。環境を守るということ自体を楽しめるようにすることが、未来の里山にとって非常に重要になってくる。



東北大学大学院 工学研究科
日本学術振興会 特別研究員

加藤 春奈

災害リスクへの対処は重要であるが、防波堤などのハード面だけでなく住む人々を含め分野を超えた計画が重要になってくると考えている。また災害被災地の復興を長期的に見ていく必要がある中で研究機関が果たす役割は大きいと考えている。



東京大学 高齢社会総合研究機構
特任研究員

呂 瑋達

研究している高齢者の里山活動について、やはり健康上の問題で阻害されるという実情がある。そうした問題に対しては、研究者だけでなく公的機関を含めた包括的な課題の解決方法が求められる。

第3部 SATOYAMAの未来に関する意見交換



千葉大学大学院
園芸学研究科

加藤 千尋

スマートフォンに慣れてしまった子供たちに無理に里山を押し付けるのではなく、こちらが里山の魅力を発信し、自発的に参加し最終的には子供たちに愛着を持ってもらうことを目標としたい。



京都大学農学部 地域環境工学科
森里海と文化研究会代表

倉内 洋翔

普段里山に触れていない人がフィールドに行くというとハードルが高く感じられるが、生活の近くにあるもの、例えば食べ物をキーとして里山に親しみを持ってもらうことが、関係人口を増やす現実的な手法となりうるのではないか。



綾町役場
ユネスコエコパーク 推進室

河野 円樹

里山づくりにはまず仲間を作ること、そしてその活動は将来にわたって地球上で自分たち人間が生きていくために必要であるということを認識することが、非常に重要だと考えている。



国連大学サステイナビリティ高等研究所
プログラム・コーディネーター

三宅 里奈

日本は里山研究に関しても進んでいる部分も多くあるため、それを世界各国に向けてアピールしていくことが重要であり、そうした発信部分の強化が求められる。

第3部 SATOYAMAの未来に関する意見交換



パネリストそれぞれが強い思いを持って、SATOYAMAの未来に対して考えている内容を議論が行われ未来の地球のためにより多くの人に、里山の活動を広げていくため活動に共感できる意味を提示し自分事化することの必要性が強く打ち出された。SATOYAMAの活動がこれから先も続いていく中で、今回のイオンSATOYAMAフォーラムがあらゆる人が動き出すきっかけとなることに強い期待が寄せられた。

第3部のグラフィックレコーディング



**イオンSATOYAMA
フォーラムの様子は
こちらのメディアでも
紹介されました**

■新聞

- ・2月24日(月)毎日新聞
- ・3月21日(金)読売新聞

■雑誌

- ・3月3日(月)週刊ストアジャパン

研究・活動紹介展示

今回のイオンSATOYAMAフォーラムも前回に引き続き
国連大学のウ・タント国際会議場で行われ、会場内には大学等の研究機関や
イオン環境財団と里山活動に取り組む自治体の研究内容が展示された。

宮崎県綾町



京都大学フィールド科学研究センター



イオン環境財団 助成団体



研究・活動紹介展示

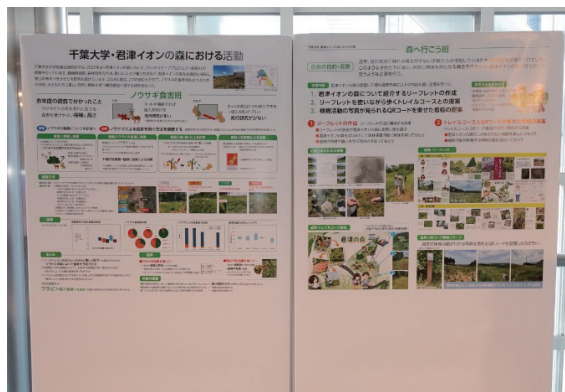
■ 京都大学



■ 国連大学



■ 千葉大学



■ 東京大学



■ 東北大学



■ 早稲田大学



会場内の記録



フォーラム開催中の様子



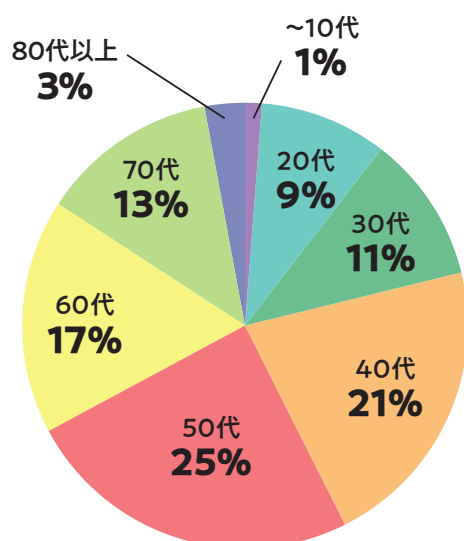
参加者アンケート

参加者数**510**名

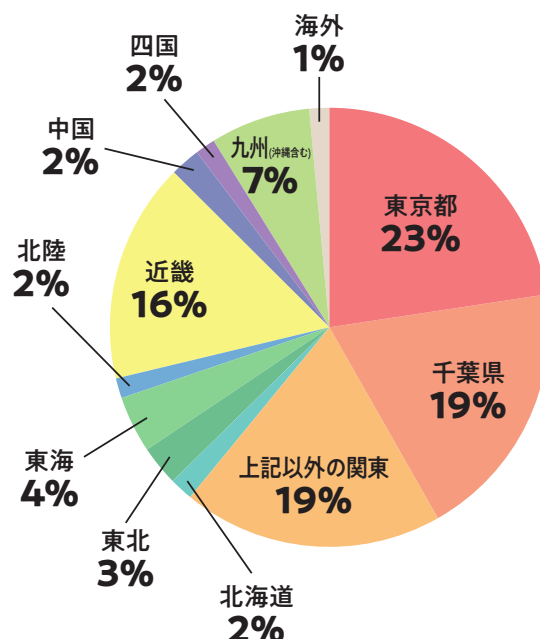
(会場180名、オンライン330名)

※アンケート結果は、その他・不明を除く

年代

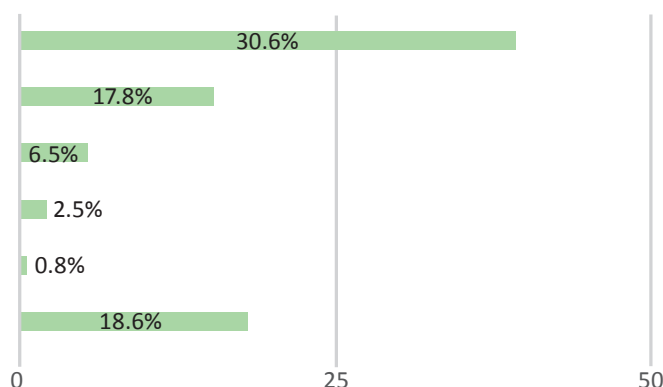


地域別



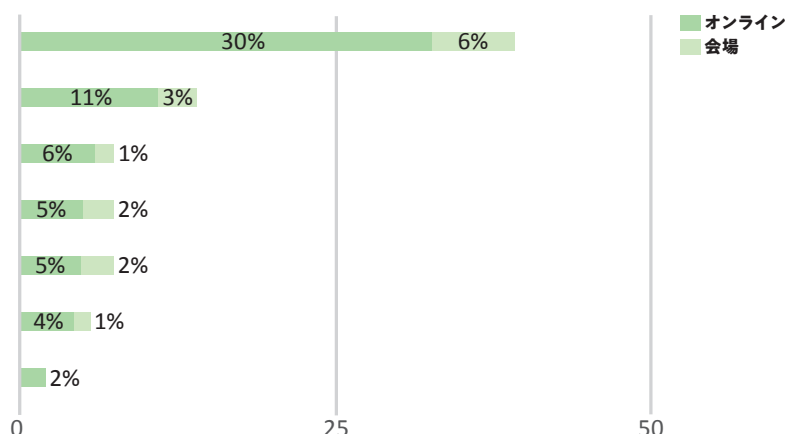
所属

企業 (イオングループを除く)
学校・大学・研究関連
NPO・NGOその他団体
自治体
政府関連機関
イオングループ従業員



参加理由

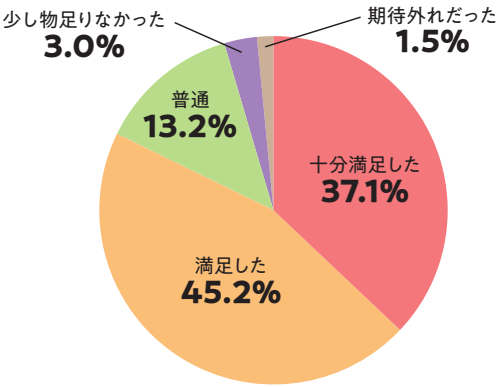
里山に興味がある
イオン環境財団の活動に興味がある
綾町の取り組みに興味がある
大学の発表内容に興味がある
里山の関係者とつながりたいと考えている
会社・団体から案内があった
パネルディスカッションに興味がある



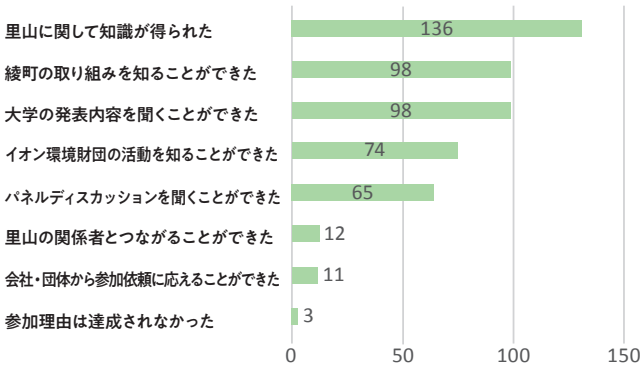
参加後アンケート

参加者数197名

本フォーラムの満足度



参加理由は達成されましたか (複数回答可)



皆さまからのご意見

イオンSATOYAMAフォーラムでは今後の運営に向けて参加いただいた皆さまよりフォーラム全体に関するアンケート（自由記述）をお願いしました。
貴重なご意見を多数いただきましたので、一部ではありますがご紹介させていただきます。

満足度	年代	お住まい	ご意見
十分満足した	30代	千葉県	各大学の皆さまが、それぞれの分野でフィールドに出て体験を得ているのが、研究そのもの以上に大きな価値を持っていると思いました。
十分満足した	40代	石川県	大変勉強になりました。特に若い世代の発表は、面白かったです。料理、健康そういったキーワードからだとなじりやすいと思います。グラフィックレコーディングも素晴らしいかったです。
満足した	30代	東京都	現地の農家の方から、研究者の方まで、幅広い方のお話をお聞きできてとても有意義な時間でした。またグラフィックレコーディングも非常に効果的でした。
満足した	50代	宮城県	第1回開催から里山づくりに活かされたことの紹介や、研究結果をもとに実際にやってみたことの成果も聞きたかったです。今回のフォーラムから、繋がりそして続けるというキーワードが響きました。
満足した	50代	栃木県	参加している人の意見傾向・集計が見えるような双方向のコミュニケーションの時間が設けられるととても良いと思いました。
満足した	50代	千葉県	初めて「里山」に触れる機会となりました。綾町の取り組みを通じて、照葉樹林などの多くの言葉を知ることから始まり、改めて自然と共生することの大切さを実感しました。植樹や育樹以外の活動にも、ぜひ現地で参加したいです。
満足した	60代	福岡県	今後も、今回の宮崎県綾町のお取り組みのように、ほかの地域での里山保全の事例や早稲田大学などのように学術での取り組みについてももっと知りたいです。
満足した	60代	福岡県	里山・海山の生態系を維持する事の大切さを知りました。高齢化が進み仕組みとしての維持をどうしていくかを自分事として考えていかなければいけないと痛感しています。
普通	30代	神奈川県	興味深い発表は多くありつつ、恐らく時間的な制約のせいで全体的に発表が駆け足で、十分に内容理解が進まなかった点が少々あったのが残念だった。
少し物足りなかった	40代	千葉県	綾町の取り組みは、地元の方々や関係者の皆さまの故郷への愛情や誇りを感じた一方で、昨今の異常気象で日向夏農園の経営は厳しい状況にあり、サステナビリティという観点でもう一歩進んだ取り組みを期待したいです。新しいテクノロジーの中にも、より生産性が高く環境負荷の少ない技術はあるので、新旧融合した新しい里山のあり方を考えたいです。



イオン環境財団は、これからも里山の保全・利活用を通じて
笑顔あふれる「新しいSATOYAMA（里山）」の構築を目指します
次回のフォーラムでまたお会いできることを楽しみにしております